

理学の本棚

10

「海洋地球化学」

地球環境は、いま確実に変化しつつある。地球の表面気温は今世紀末には平均1～3℃上昇する可能性が高いといわれる。産業革命以来、人類は大量の二酸化炭素を大気中に放出してしまった。今後も放出し続ける以上、温暖化は避けようがない。ところで地球表面の7割は海である。熱容量の大きな海は、大量の熱をため込み、気候を支配している。海から目をそらしたら、今世紀の地球とはつきあって行けない。海について科学的知識のあるながし、今後、重要な局面での意思決定を左右することになるかもしれない。

海洋に存在する化学物質の分布や挙動を正確に記載し、それらの意味するところを読み解き、海洋環境を構成する複雑な因果関係や維持機構を解明しようとするのが、「海洋地球化学」と呼ばれる学問分野である。本書は、

その広範な研究対象の中から、初学者にとって特に重要と思われる項目を厳選し、平易に解説することを心がけて企画・執筆された。地球の重要なサブシステムである海洋は、物質やエネルギーの流れを介して、地球システム全体と強く関わっている。海水中の元素や同位体の動きは、このような海洋の営みを支えるいわば潤滑油である。

筆者は附置研究所に勤務しているのですが、学部生を対象に講義を行う機会は少ない。大学院は理学系研究科化学専攻で、「分析化学特論I」を隔年で担当している。ただ10数年前、北海道大学理学部地球科学科に4年ほど勤務したとき、学部3年生を対象に毎年「地球化学」の講義を行った。地球化学といいながら海の話ばかりしていたので、実質は海洋地球化学だった。本書の下敷きになったのはその時の講義録である。本書は11章からなるが、そのうち7つの章は専

蒲生 俊敬（大気海洋研究所 教授、化学専攻）

門家の方々が執筆を分担され、私が行ったかった講義の内容を格段に深めて下さった。これから海洋地球化学を身につけ、今世紀を生き抜こうとする大学生・大学院生によって、本書が活用されることを願っている。



（編・著）蒲生俊敬「海洋地球化学」
講談社（2014年）
ISBN 978-4-06-155237-1

理学部バレーボール大会

安東 正樹（物理学専攻 准教授）

1972年頃から約20年間、理学部旧一号館の中庭にあったバレーボールコートで理学部バレーボール大会が開催されていた。当時の事務部長の寄付で優勝杯を購入し、事務長杯として開催されたのが始まりである（のちに学部長杯と改名）。その後、最盛期には50以上のチームが参加していた。大会は学科対抗/研究室対抗戦の様相も呈しており、出場選手以外にも応援や観客が多く集まっていた。「中庭という特殊性に起因する風の影響や太陽による目眩ましなどの自然との戦いに勝ち、野次と怒号などにもめげず優勝を勝ち取ることは容易ではなかった」（理学部広報1991年12月号P.6）と、当時の活気が伝えられている。女性や教官をメンバーに含める、など多くの

人が楽しめるような工夫もあったそうである。

1994年頃に理学部1号館建て替えの際にコートが取り壊され、この大会はその幕を閉じた。

理学部内でこれほどまでに教職員・学生が一体となって盛り上がるイベントは他には無かっただろう。私は大会に参加す

ることができなかったが、楽しそうに思い出を語る先輩方は多くいた。普段とは違った交流が図れる場であり、円滑な教育・研究環境の構築に役立っていたことは想像に難くない。個人的な経験談だが、大学院生時に外国の大学に滞在していた際、学内のソフトボール大会に誘ってもらったことがあった。初心者でも楽しめるようにルールが良く工夫されており、現地の環境に馴染むのに大きな助け



理学部バレーボール大会の様子（理学部広報1985年1月号より）

になった記憶がある。近年、学部の国際化や、教職員及び学生の心のケアの問題などが議論されることも多い。それらに対する解の一つとして、スポーツ大会というものもあり得るのではないかな。

温教知新

— 第8回 —